

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

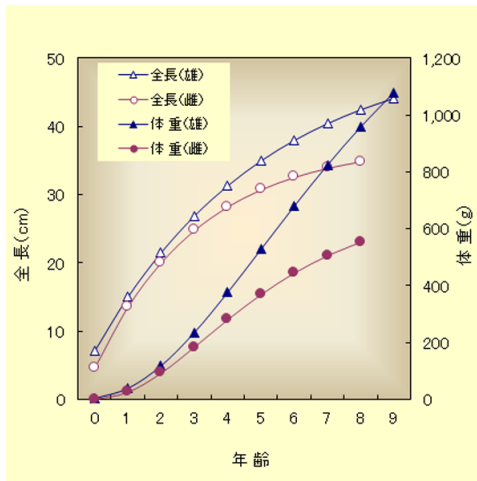
[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 アカアマダイ
学名 *Branchiostegus japonicus*
系群名(海域) 日本海西・九州北西部
担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 雄10歳、雌9歳程度
成熟開始年齢： 雌：2歳(24%)、3歳(40%)、4歳(52%)、5歳(74%)、6歳(92%)
雄：3歳(3%)、4歳(35%)、5歳(46%)、6歳(69%)
産卵期・産卵場： 対馬北東海域で7～11月、日本海南海域で6～10月、水深100～130mの海域
食性： 魚類、甲殻類、多毛類、頭足類、貝類、棘皮動物
捕食者： 底棲の大型魚類

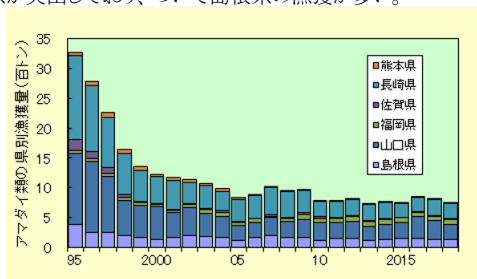
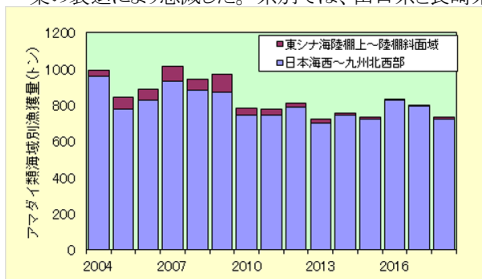


漁業の特徴

漁業の主体ははえ縄漁業(はえ縄)で、その主漁場は、島根県では島根半島沖、山口県では見島周辺から対馬東方にかけての海域、長崎県では対馬周辺海域および北松海域である。沖合底びき網漁業(沖底)でも漁獲されるが、はえ縄と比較して漁獲物に占める小型(低年齢)個体の割合が高く、主要な漁獲対象にはなっていない。2000年以降は我が国のアマダイ類(アカアマダイ・シロアマダイ・キアマダイ他)の漁獲のうち9割以上がアカアマダイであると推測される。

漁獲の動向

本資源評価では、日本海西・九州北西部において島根、山口、福岡、佐賀、長崎、熊本の6県により利用されるアカアマダイ資源を評価した。本資源評価の対象となる日本海西・九州北西部での漁獲量は、2004年以降の値が整備されている。2010年以降は750トン前後で推移しており、2018年は724トンであった。当資源評価の対象海域外での漁獲を含む6県のアマダイ類の総漁獲量は、1995年以降整備されているが、2000年にかけて、東シナ海における漁業の衰退により急減した。県別では、山口県と長崎県が突出しており、ついで島根県の漁獲が多い。



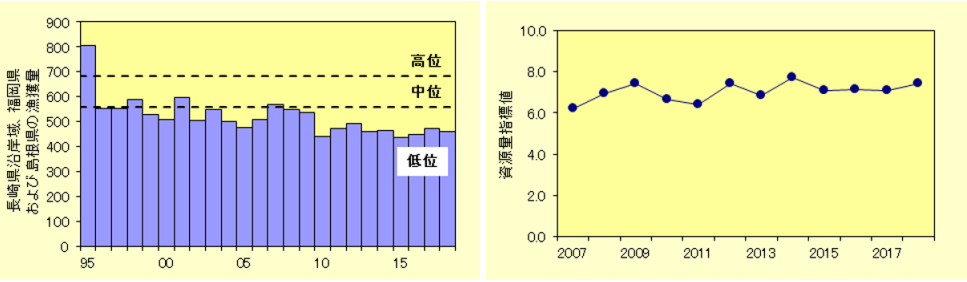
資源評価法

1995年以降の日本海西・九州北西部に限った漁獲量データが利用できる島根県、福岡県および長崎県沿岸域の漁獲量をもとに、資源水準を判断した。動向は、沖底2そうびきの標準化単位努力量あたり漁獲量(CPUE)、島根県はえ縄のCPUE、山口県はえ縄・釣漁業のCPUE、長崎県はえ縄のCPUEの相乗平均から算出した資源量指標値の変動から判断した。

資源状態

資源量指標値は、算出可能な2007年以降、変動しながら上昇傾向にある。島根県、福岡県および長崎県沿岸域の漁獲量の合計の最大値(804トン)と最小値(436トン)の間を3等分し、高位・中位・低位を区分する基準値とした。2018年の当該漁獲量の合計461トンから、資源水準を低位と判断した。最近5年間(2014～2018年)の資源量指標値の推移から、資源動向を横ばいと判断した。





管理方策

再生産過程に不明な点があるものの、資源水準が低位にあるためこれを回復させるために、漁獲を抑制することが必要である。漁獲量を減じたうえで、資源量指標値の変動に合わせて漁獲することを管理目標とし、2020年ABCを算定した。なお、現在アカアマダイを対象とする漁業に対して、操業時間の制限、休漁日の設定などの努力量削減の取り組みに加え、若齢魚保護を目的とした漁具規制も行われている。アカアマダイ成魚は定着性が強いので、若齢魚保護の取り組みを今後も継続し、加入した資源を有効に利用することが求められる。

管理基準	Target/Limit	2020年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの 増減%)
0.8・C2018-1.02	Target	473	—	—
	Limit	591	—	—

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、安全率 α を掛けた漁獲量
- 算定規則2-1)により $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot C_{2018} \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算し、係数 α には標準値0.8を用いた
- C2018は日本海西・九州北西部における2018年の漁獲量で、724トン
- 資源水準が低位であるため、 δ_1 は0.8を使用した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算をし、kは係数(標準値1.0)、b(0.15)とI(7.23)は直近3年間(2016～2018年)の資源量指標値の傾きと平均値を用いた

資源評価のまとめ

- 漁獲量より、資源水準は低位
- 資源量指標値より、資源動向は横ばい

管理方策まとめ

- 漁獲量を減じたうえで、資源量指標値の変動に合わせて漁獲することを管理目標とし、2020年ABCを算定した
- 資源水準が低位にあり、回復させるために、漁獲を抑制することが必要
- 若齢魚保護の取り組みを今後も継続し、加入した資源を有効に利用することが求められる

執筆者: 酒井 猛・川内陽平・青沼佳方

資源評価は毎年更新されます。